

01

流れ山の地域資源化に向けた基礎的研究 「流れ山」の可能性



仁賀保高層最南端の風車エリアに位置する仁賀保高層展望台から望む鳥海山(2,236m)。この場所からは、約2,500年前に起きた噴火に由来する「山体崩壊」と呼ばれる山崩れの痕跡を目撃することができる。眼下にブナの原生林、西に日本海、岩岸などのがらがらの範囲にある中島台・獅子ヶ鼻湿原や冬節湿原などの位置も確認できる。鳥海山から流れ出した大量の土砂は日本海を埋め、象潟、金浦、平沢まで広がり、鳥海山麓から日本海へと至る現在の景観が形成された。



流れ山の土地利用、防災上の役割、アクセシビリティの分析（ポスターセッションより）

- | 土地利用 | ●平沢地区の中心部では神社と墓地として利用
●中心部の外縁にあたる大沢川沿いでは展望台や公園として利用 |
|----------|--|
| 防災利用 | ●5カ所の流れ山が指定緊急避難場所に指定
●3カ所が急傾斜地崩壊危険箇所等に指定 |
| アクセシビリティ | ●全ての流れ山のアクセス路（階段やスロープ）は整備済み
●神社や公園といった不特定多数の人々が利用する流れ山は通り抜け可能 |

いかほの日常の風景に溶け込んでいる流れ山の名称や歴史、特徴などを盛り込み、写真とMAPを入れて構成した小さなカード「流れ山カード」。清水が湧き、平沢館という城があった「清水山」、戊辰戦争で本陣が敷かれた「長瀬山」、戸戸時代には異国船を監視する番所が設けられた「丁刃森」などそれぞれに特徴があります。（制作：石戸凜、友杉悠葉、長谷川由美、藤原すも、山下暁羽）

土地の特性を重層的に反映 流れ山の新たな景観的意味を発見する

先行研究において、流れ山の大きさは金浦、仁賀保、象潟の順に小さくなる傾向にあることが明らかにされています。このことは、にかほのまちに何をもたらしているのでしょうか。

井上らの仮説は次の通りです。

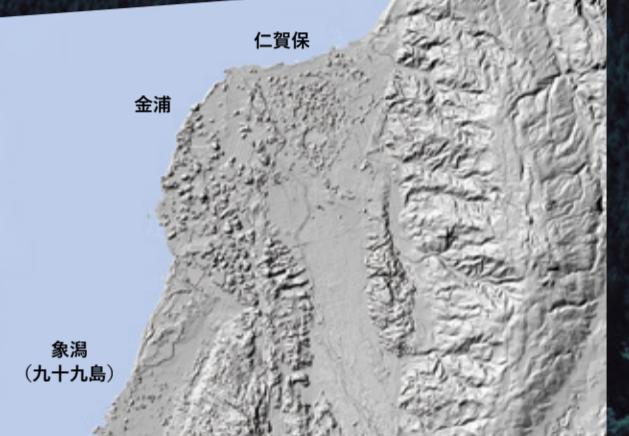
①流れ山は、まちをつくる上で障害になるので、地区全体の土地利用に直接的な影響を与えていたのではないか。
②流れ山自体の利用形態は、周辺より高いといつ地形的特徴を活かしたものが多くあると推察される。しかし、それらは律ではなく、大きさの相違が利用形態に一定の傾向を生み出しているのではないか。
この前提に立つと、流れ山が単に地形の起伏という「背景」ではなく、地域の特性が反映された景観要素として前進化してきます。そこでは、旧仁賀保町の中心市街地だった平沢地区の流れ山について分析を行いました。その結果、流れ山は神社や墓地として利用されているほか、展望スポットや都市公園として整備されており、その時代に応じた利用形態が認められました。私たちの眼前に広がる流れ山群の景色は、鳥海山の山体崩壊という自然現象と、小山という特性を活かし育んできた地域の文化が重ね合わさっているといえます。流れ山には土地の特性が重層的に反映されているのです。

地域資源として活かせるか

流れ山を歩き、ひとつひとつを調べるところもとした小さな森はかつての要害であったり、神社であったり、清水が湧く城や日和山であったり、墓地や畑として使われていたり、現在は避難所として利用されていたりとそれぞれに古き歴史と特徴があります。これらを地域資源としてどう活かせるのか、流れ山プロジェクトでは様々な試みを実践していきます。



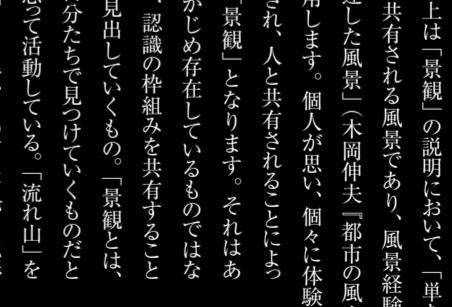
「流れ山」とは、火山が山体崩壊を起こし、膨大な量の土砂や岩石が堆積した上にできる突出した地形のことをいいます。日本各地で認められる地形で、時には磐梯山や島原に代表される風光明媚な地形を生み出してきました。にかほ市でも、象潟地区に点在する流れ山「九十九島」は名勝天然記念物に指定されています。この「九十九島」は、紀元前に鳥海山で起きた山体崩壊（象潟岩屑なだれ）がもたらしたものですが、同時にその北側に位置する金浦地区や仁賀保地区にも多くの流れ山が生み出されたことはあまり知られていません。両地区には、象潟地区より大きな無数の流れ山が存在し、それらは市街地に近接することから日常生活と密接な関係を構築していることが推察されます。本研究では、流れ山群を分析することで、この土地の生活環境の形成に新たな視座を投げます。



地理院地図(電子国土Web)を用いて作成

流れ山をまちづくりの重要なピースに

「流れ山の地域資源化に向けた基礎的研究」では、これまであまり知られてこなかった象潟以外の流れ山に着目しています。井上宗則は、「現状の流れ山に着目しています。井上宗則は、学生5人（石戸凜、友杉悠葉、長谷川由美、藤原すも、山下暁羽）と共に文献調査、空中写真による分析、現地調査やアーリング調査に着手し、そこで得た知見を学会での発表やまち歩きイベントの企画に展開していくことを試みています。こうした研究成果の公表は、近い将来、流れ山がいかほ市の地域資源としてまちづくりの重要な要素にならうこと期待して行っています。



時間的、空間的に共同化されたにかほの「景観」

井上は「景観」の説明において、「単なる個人的な風景だけではなく、集団的に共有される風景であり、風景経験の進展に伴い（型）としての客觀性に到達した風景」（木岡伸夫「都市の風土学」2009年）という定義をよく引用します。個人が思い、個々に体験する「風景」は時間的、空間的に共同化され、人と共有されることによって「景観」となります。「景観」とは、自分たちで見つけたものだと思って活動している。「流れ山」を知らないことで、目の前に広がる地形の起伏の捉え方が異なることがあります。それは、新しい景観をつくり出していくといえるのではないか」と井上は話します。本研究では、分析や調査した成果を多くの人と共有していくことが重要となります。

これが、あらかじめ存在しているものではないだろうか」と井上は話します。本研究では、分析や調査した成果を多くの人と共有していくことが重要となります。



実験的に、新しい遊びを山のなかでするんだと聞いて、いいなと思って参加しました。登山みたいに頑張って登らなくても、道具をいっぱい持ってキャンプをしなくとも、いろんな過ごし方ができるんだと。

森の中で自分は何ができるかなあと、考えていました。落ち葉を貼ったり、文章を書いたり。写真を撮るのもいいけれど、他にもいろんな出来事を記録したいなと思っていて。まっさらなスクラップブックがあったので、それを持っていきました。ちょうど本を作りたい気分だったので。

木を描こうと思っていたわけではなくて、高めの切り株があったので、それに登ったかったです。アクロバティックなところに立つのが好きで。それで切り株に登ってみたら、俯瞰で木がかっこよかったと、山本がいい感じで木の根元をいじっていたので、そのまま描きました。予定ではたくさん描いてノートを埋めるつもりでしたが、描き始めたら完成させたくなかったので、ずっと切り株の上に立って、1枚集中型で描きました。

散策していて偶然落ちていた木が目に止まり、拾って樹皮を剥いでみると、きれいな木肌が見えてきたので流れでそのまま磨いてみることにしました。磨かれた木は、なんだか“いい木”っていました。無心になった結果として“何かいいもの”ができてしまった感覚には、普段の制作とは違う充実感がありました。

私はフィルムカメラで写真を撮ったり、みんなの作業姿や寝顔をキャラクターにしてお絵描きました。森では景色を眺めながら刺繡をしました。アニメーション制作に使えるかなと思って、刺繡セットを買っていましたが、なかなか使えていませんでした。でもこもこした刺繡が作れるので、森のものもこと近いかもと思って持っていました。刺繡のタイトルは、「あがりこ大王」です。森の奥に奇形ブナがあって、その名前が気に入ったので。

小瓶の中にズグロオニグモを飼っていて、森にも一緒に連れていきました。作品制作に使うので、元気でいてほしいのだけれど最近餌やりをサボっていて。だから森のなかで、いい虫を食べさせてあげました。昆虫は山の麓なのに意外に多くて、小屋やベンチなどで見つけやすかった。空の瓶に細長いカメムシと、蜘蛛数種類を入れました。

森のなかでは、足の裏から伝わってくるふかふかとした芝生や、湿った土の感覚が面白かったです。海にも行ったのですが、海岸の砂が湿っていて、木村さんが「もちもちして〜る」と言っていました。砂浜にはつけないオノマトペなのに、確かにもちもちしていて面白かった。

登らずに、ただひたすら山のなかに滞在する時間を使大生たちと過ごした。

自分が650キロ車を走らせて到着した場所。彼らが日々の制作をしている場所。

目の前の環境や作られたイメージに対するそれぞれの適切な距離感。

そういう眼差しに、落ち着く。

そう、どこにいても私たちが行っているのは、それぞれの計測なのだ。

切り株の上から一步も動かず、ひたすら森の木を描き続ける人。

昆虫を題材に作品制作している学生の虫かご網に集められるもの。

木を削り続ける彫刻家のノミが生み出すかたち。

森の中でセルフポートレートを撮る女子たちの、繰り返される小走りと、笑い声と、構図。

アニメーション作家の紡ぐ糸。

古いカメラを使って採集した落ち葉や木の実を撮る学生は、それをスケッチブックに挟んでいく。

刃を研ぎ続ける新人猟師は、初めて仕留めた熊を手土産に、夜みんなに熊汁を振る舞ってくれた。

そのなかで自分もまた、そこで起きていたことを写すという時間を過ごした。

それはかつて自分が行っていた、山と街の間に滞在する

「マウンテン・ミーティング」という場で起きていたことの延長線上にある時間のようだった。

自分の使っている物差しを確かめるような時間。

緩やかに、次のこの始まりの為にある時間。（嶋津穂高）

撮影：嶋津 穂高

学生引率で野外に行くと、道具の手配や食事の管理に心を碎くのですが、今回は全てほったらかしです。多くの人は、特にやることがなくなると「退屈」という感情が湧いてきます。その根幹には、出先では何かしなければいけないという強迫があるように感じます。日頃、課題発見する訓練をされた学生であればなおさら、退屈を避ける行動をとるでしょう。ですが、彼らに更に大きな暇を与えることで、退屈ではない閑暇、時間を創造してくれる期待しました。その試みに“そとね”と名付け、実験の場が“にかほ”です。

迫るカメラが各々の時間に影響を与えることなく、閑暇を記録する方法も考えました。嶋津さんからいただいた俯瞰の目線のアイデアがノーリングです。ノーリング(knolling)とは、配置した複数の物を真正から撮る撮影手法のことです。森での事象をカメラで追うのではなく、滞在前後の持ち物から描く試みです。(萩原健一)

登らずに、ただひたすら

森のなかに滞在する時間

鳥海山麓 野生めぐり

魂の感覺、生と死

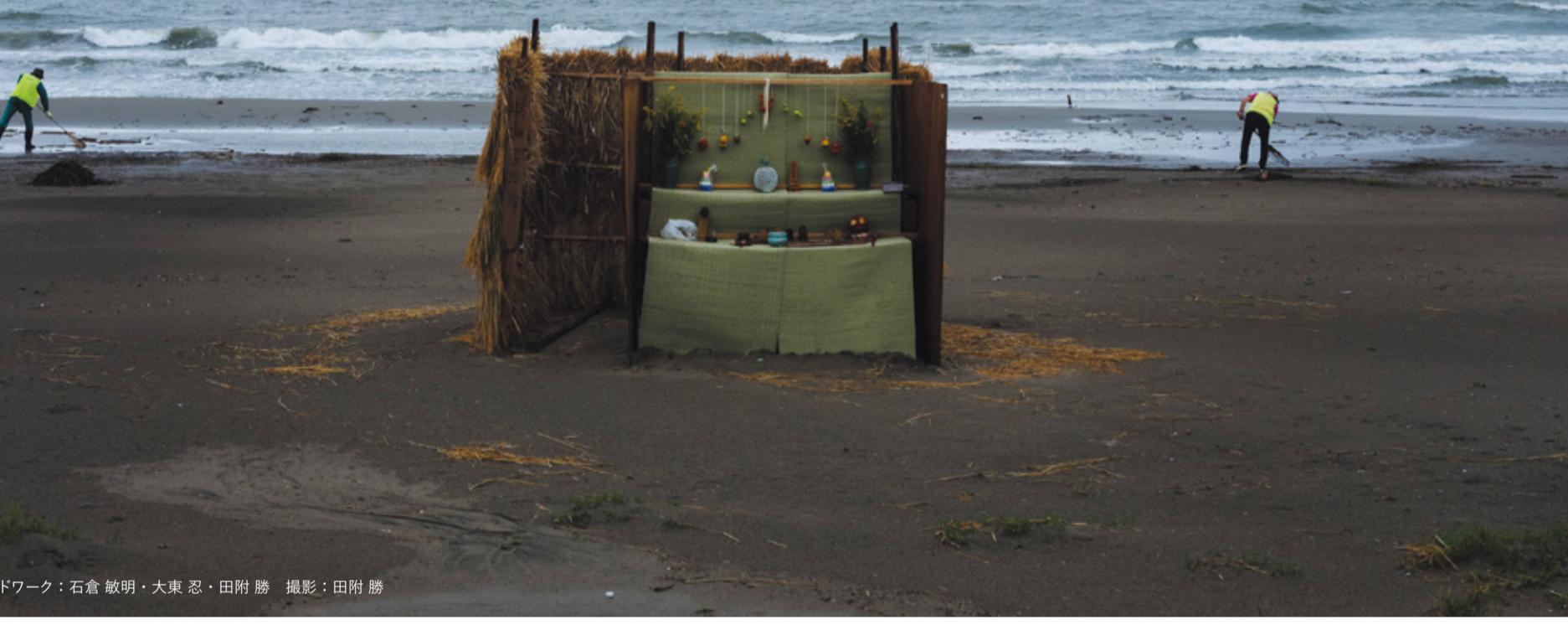
盆小屋行事の迎え火から夜明け、彼方に飛島が見える朝。由利海岸波除石垣や地域の小さな資料館を廻り、羽後から羽前へと移動して遊佐の十六羅漢へ。岩に溶け込んだ魂の表現は壮絶です。さらに縄文時代の遺跡密集地でもある吹浦を抜け、鮭の養殖場の裏に立つ鮭靈供養塔。そして清冽な湧き水を湛える「丸池様」と牛渡川、遊佐町歴史民俗学習館 吹浦口の鳥海山大物忌神社へ。鳥海山麓の人間や家族といったスケールを超えた大地の歴史、そしてそのなかにあるヒリヒリとした魂の感覺や生と死の思想に触れ、改めてこの地を「辺境」などという閉じたカテゴリーに押し込めてはいけない、という思いを新たにしました。簡素な盆小屋をめぐる物語を超えて、鳥海山と飛島の間に広がる壮大な魂と世界のイメージに触れることで、制度化された知や県境という単位で管轄された行政・観光産業がどれだけ現実の歴史を断片化・細分化しているかを再認識させられます。

島民の精神性に触れる

念願の飛島。象潟の盆小屋から見ると、海の彼方に浮かぶ淨土のように見えます。天候の都合で宿泊はできなかつたけれど、田附勝さん、大東忍さんと共に切れ切れの晴れ間が続くうちに駆け足で廻りました。海底山脈が隆起したような奇岩・巨岩の数々。鳥海山の火山活動との連続性を感じさせてくれる柱状節理やテキ穴と呼ばれる海水による侵食洞窟。島民の精神性を深くうかがわせる賽の河原や小物忌神社といった聖地。地質的にも生態的にも全てが圧倒的な場所。

小屋を守り、行事を支え、死者を送る

15日夜に行われた象潟の盆小屋行事送り火。直前までの大雨、そして種火を吹き飛ばすほどの浜辺の強風のなか、これまで見たなかで最も小さく、シンプルな形で送り火が行われました。秋田では子どもたちを中心に新型コロナウイルス感染症が拡散しているので、いつもと違つて子ども会などが関わっていない異例のお盆。それでも小屋を守り、行事を支え、最後には解体して火を消すところまで完遂する大人たち。そして、小声で送り火の歌を歌う子どもの姿が印象的でした。祭りを支えている保存会の面々は全盛期に小屋のなかで寝泊まりして、先輩・後輩の世代と交流した記憶の保持者でもあります。今回は特別な事情もあって、雨の合間に何度も顔を合わせて、お話を伺う時間が取れました。それにしても、迎え火からの迫り方は、まさに鬼気迫るものがありました。



フィールドワーク：石倉 敏明・大東 忍・田附 勝 撮影：田附 勝

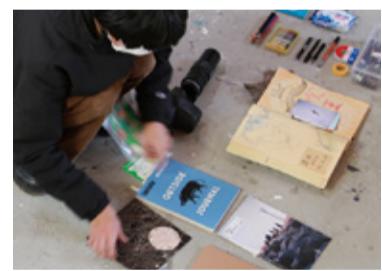


流れ山の「つくり方」と「歩き方」

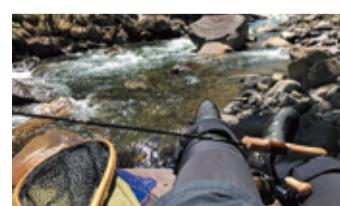
「流れ山の地域資源化に向けた基礎的研究」(p4-5)の一環として、仁賀保公民館むらすぎ荘で11月13日(日)、金浦・仁賀保地区の流れ山に注目したトーク&ウォーカーのイベント「ながれ散歩」が開催されました。鳥海山で起った山体崩壊や「流れ山のつくり方」について大野希一氏(鳥海山・飛島ジオパーク推進協議会 事務局次長兼任研究員)がレクチャーし、企画した井上は「流れ山の資材性」と題して観光資源としての可能性について話しました。その後、ジオパークガイドの茂野正信氏の案内で約50人の参加者と共に歩き、仁賀保地区の流れ山の地形や歴史、古くからの使われ方などについて触れました。当日の様子は『手長足長』Vol.02に掲載予定です。



映像作家・嶋津穂高
「にかほでそとね」のプロジェクト(p6-7)では雪が降る前の11月、ビジュアルアーツ専攻に所属する学生6人と萩原健一、櫻井隆平、映像作家の嶋津穂高氏が中島台の森や象潟海岸に滞在しました。ノーリング(knolling)とは、道具を整然と配置して俯瞰で写す撮影スタイルのこと。マルセル・ブロイヤーなどの家具を扱うknoll社において、建築家でありデザイナーのフランク・ゲーリー氏の家具を作る際に生まれたメソッドです。プロジェクトでは滞在の前後にそれぞれの道具や採集したものを並べ、映像を撮影しました。ただひたすら森のなかに滞在する時間、タスクもなく黙々と手を動かす時間。森で過ごした時間の映像は、2022年度内に公開予定です。



移動を止めて、天体／地面／身体を観察する



5月下旬の渓流散策。白雪川上流部にて

にかほ市×秋田公立美術大学協働プロジェクト「ジオカルチャー研究プロジェクト」「にかほでそとね」萩原健一 嶋津穂高 櫻井隆平 木村萌 出口佳弥乃 白田佐輔 堀江侑加 村田晴加 山本慎平 「流れ山の地域資源化に向けた基礎的研究」井上宗則 石田駿太 石戸凜 友杉悠葉 長谷川由美 藤原すもも 山下暁羽 「野生めぐり」にかほ版「石倉敏明 田附勝 尾花賢一 大東忍 コーディネーター|村田剛 伊藤あさみ (NPO法人アーツセンターあきた)

「ジオカルチャー研究プロジェクト」研究レポート《手長足長》Vol.01 2022年12月発行 デザイン|上野ゆきこ 編集|高橋ともみ 撮影|田附勝 嶋津穂高 萩原健一 伊藤靖史ほか 表紙|尾花賢一 企画|公立大学法人秋田公立美術大学 制作|NPO法人アーツセンターあきた 印刷・製本|秋田活版印刷株式会社 発行|にかほ市 〒018-0192 秋田県にかほ市象潟町字浜ノ田1番地 ※本紙は、にかほ市×秋田公立美術大学協働プロジェクト「ジオカルチャー研究プロジェクト」の一部として作成しています。※ジオカルチャー研究プロジェクトに関するお問い合わせ NPO法人アーツセンターあきた TEL.018-888-8137 ※本紙の無断複写・複製・引用を禁じます。